

所属	言語文化研究科 中国・韓国言語文化専攻 修士課程	修了年度	平成 22 年度
氏名	山田 健二	指導教員 (主査)	小林 寛

論文題目	日本語の「している」と韓国語の「하고 있다」の対照研究
------	-----------------------------

本文概要

日本語の「している」は韓国語の「하고 있다」に対応すると言われている。しかし、「している」がすべて「하고 있다」に置き換えられるわけではなく、「아/어 있다」形式で対応される場合もある。この「している」と「하고 있다」両語の対照研究は数多く行われており、そのほとんどは「している」と「하고 있다」をひとつの語彙としてとらえて考察している。これに対し、本研究では「している」と「하고 있다」をそれぞれ、「する+いる」「하다+있다」の複合語としてとらえ、両語における違いは「している」と「하고 있다」という語彙を構成している「する」と「하다」、「いる」と「있다」それぞれの意味相違から生じて来るという仮説をたてた。

日本語の「する」は形態的には動作を表す実質的意味を持っている名詞と結合しやすいといった点において、意味的には全くの無色透明であり、動詞としての特徴を形式的にしか有していない「形式動詞」と解しうる。一方、韓国語の「하다」は日本語の「する」以外に「言う」「思う」といった意味として解釈をされる場合があり、用法的にも「状態性名詞」である「건강=健康」に付いて「건강하다=健康だ」、「로맨틱하다=ロマンティック」といった外来語に付いて「로맨틱하다=ロマンティックだ」という形容詞になる。また、「하다」の前に「못」「아니」という否定を表す副詞に付いて「말을 못하다=話ができない」「예쁘지 아니한다=きれいでない」といった表現を表すことができる。こうした様々な意味・用法があることは逆に「하다」に実質的な意味がないことを示している。したがって、複合語の「している」「하고 있다」になった場合も、両語の実質的な意味を持たないという点がそのまま反映されて、大きな意味差異は生じない。

次に「している」と「하고 있다」のもう一つの構成語彙である「いる」と「있다」について考察した。日本語の「いる」は「動きのあるものの存在・所有を表す動詞」で、「過去に動きがあるもの」「現在動きがあるもの」「内在的に動きがあり未来に表出するもの」を表すことができる。従来、「いる」には実質的意味はないとされてきたが、「いる」自体に「進行」や「持続」「完了」の意味が備わっていると考えられる。これは今までの先行研究の多くが「いる」は「有情物」「有生物」を「ある」は「無情物」「無生物」の存在を表すものだという点を中心に展開されてきたことに対する回答ができたと考えられる。一方、韓国語の「있다」は日本語のようにその存在対象を「有情物」か「無情物」か、「有生物」か「無生物」かといった区別をすることもなく、「있다」でその存在・所有を表す。また、「있다」の補助用言としての用法を見ていくと、「있다」自体には何ら「進行」や「持続」を表す意味はなく、むしろ、「고 있다」の「고」や「아/어 있다」の「아/어」に「進行」や「持続」「完了」の意味があると考えられる。

「している」「하고 있다」を「する」「하다」「いる」「있다」に分け、語構造の分析を中心に考察し、複合語となった「している」「하고 있다」を比較検討した結果、日本語の「している」には大きく分けて「継続相（進行中・結果残存・繰り返し等）」と「完了相（記録・効力持続・完了・反事実等）」という様々なアスペクト的意味を含んでいるのに対し、韓国語の「하고 있다」に一部、「結果相」を見ることができたものの、その意味の中心は「継続（進行）」である。こうした日韓両語の違いは日本語の「いる」と韓国語の「있다」の意味の差およびそれぞれの連結語尾「て」と「고・아/어」の用法の違いから生じて来ると考えられる。